

## 弥生時代後期における伊勢湾沿岸地域の一様相

奈良 康正

はじめに

濃尾平野を中心とする東海地方は、弥生文化の初現期においては、「いわゆる遠賀川系文化の東端であり、一方、水神平系と呼ばれる条痕を施した土器の分布圏の西端<sup>(注1)</sup>」に位置するという東西文化、換言すれば縄文文化と弥生文化が接触する地域として文化的に複雑な様相を呈していたものと考えられる。そして、それ以後における東日本への弥生文化の波及を論ずる際にも欠くことのできない課題を提起している地域である。

今回対象とする弥生時代後期においても、この伊勢湾沿岸地域(以下、伊勢湾沿岸地域とは尾張地方と伊勢地方を中心として、これに近接する三河地方、及び天竜川以西の西遠江地方、さらに美濃地方の一部を含む地域を便宜的にこう呼ぶこととする)は来るべき次の時代へと向けて、自らの地域内において様々な変革を行い、古墳出現の直前期においては、西側社会と拮抗し得る一大勢力圏へと発展し、東日本社会に対しても、重大な影響力を具備する地域へと成長していたものと考えられる。

こうした背景のもと、当該地域を代表する弥生時代後期の土器型式は「山中式」として広く認識されており<sup>(注2)</sup>、濃尾平野低位部において成立した当型式はその後、周辺地域へと影響を与え始め、一つの様式圏を形成することとなる。

しかし、この「山中式」が当該地域を代表する土器型式でありながら、その成立に際しては出自のすべてを濃尾平野内部に求めることができず、他地域からの新たな型式の移入に触発されて成立したものであるとする指摘は、型式設定の当初からなされているものであり、実際に、その見解に対しては、ほぼ誤りがないものと考えて差し支えないであろう。以下、本稿においては、「山中式」成立にかかわった他地域からの土器の移入、および「山中式」成立以後における周辺地域への影響を、考察することとしたい。

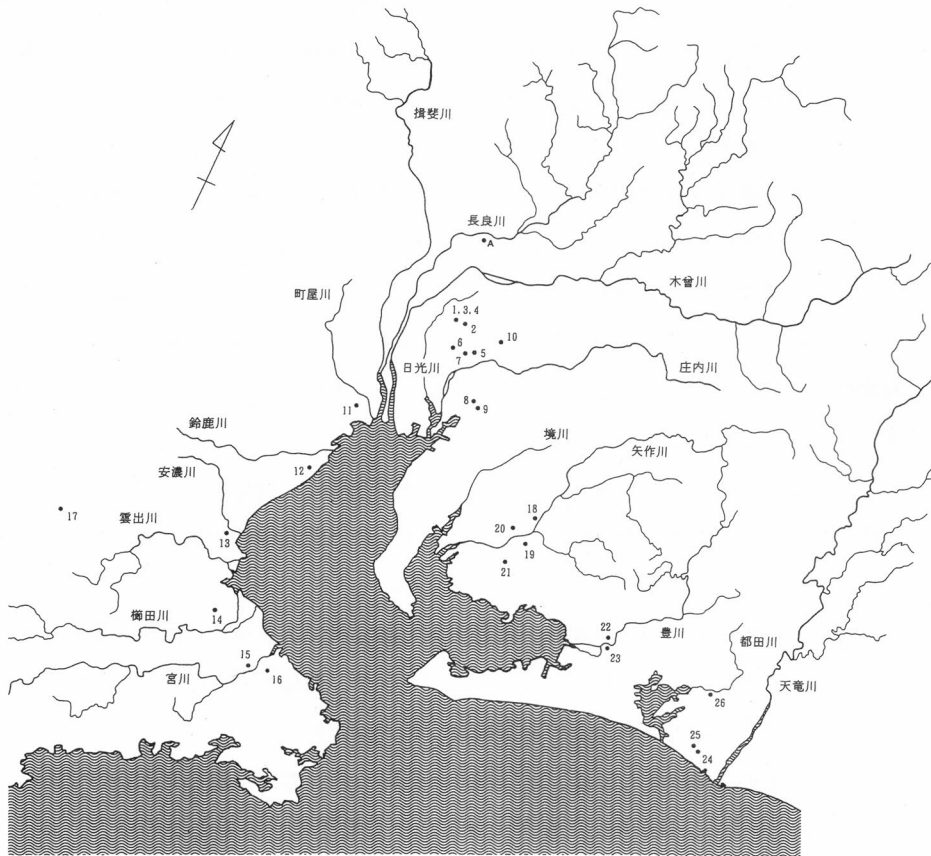
### 1. 成立の契機、及びその伝播経路

まず、山中式が如何なる要因によって成立したのかを考えてみたい。

山中式は、様式設定の当初からその成立の契機として、畿内からの影響が指摘されて

(注3) いた。主要な器種の中にも、その出自が濃尾平野に求めることのできる尾張独自の<sup>(注4)</sup>のものと、その出自を内部に求めることができず、その成立に際し外部からの影響を多大に受けたものとが考えられている。前者は、高坏Ⅱ類、壺類、鉢Ⅰ類、甕Ⅰ類、器台等であり、後者は、高坏Ⅰ・Ⅱ類、鉢Ⅱ類等である。

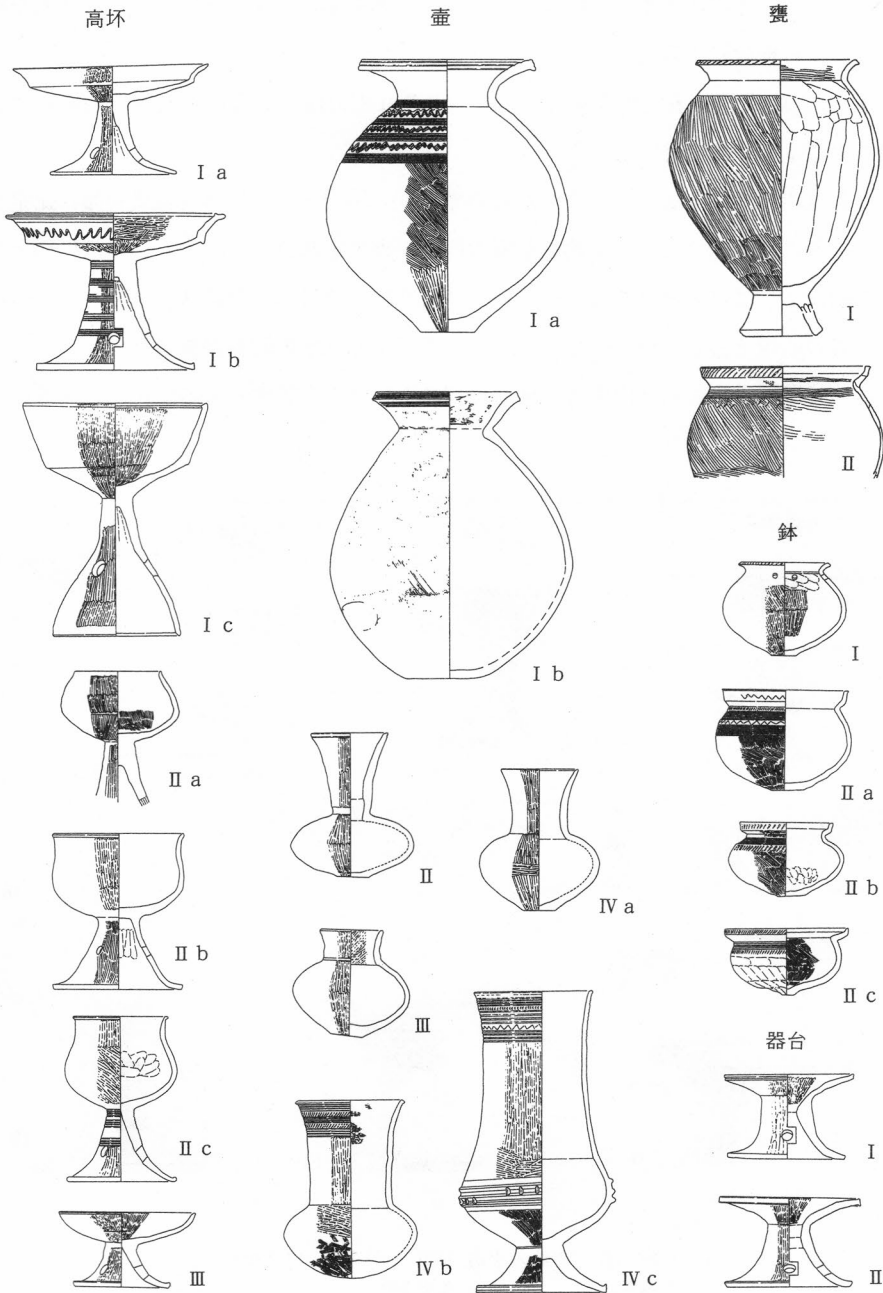
ここでは、とくに加飾性が強く、赤色顔料の塗布等がしばしば見られる高坏Ⅰ類に着目して検討を加える。これは、高坏という器種がその本質は、モノを盛る器であるとするものの、一方では、祭祀に深くかかわる器種として弥生時代中期より、畿内では壺とともに水稲農耕とそれに伴う祭祀に不可欠な存在として深く生活にかかわりを持つ様になり、また、後期になってからは各地の遺跡において全体の土器に占めるその構成比率が爆発的に



第1図 遺跡分布図

- |             |            |             |          |           |
|-------------|------------|-------------|----------|-----------|
| 1. 山中遺跡     | 2. 蕪池遺跡    | 3. 北川田遺跡    | 4. 苗代遺跡  | 5. 朝日遺跡   |
| 6. 堀之内花ノ木遺跡 | 7. 廻間遺跡    | 8. 瑞穂遺跡     | 9. 高蔵遺跡  | 10. 岩倉城遺跡 |
| 11. 西ヶ広遺跡   | 12. 上箕田遺跡  | 13. 納所遺跡    | 14. 草山遺跡 | 15. 中樂山遺跡 |
| 16. 隠岡遺跡    | 17. 藏持黒田遺跡 | 18. 矢作川河床遺跡 | 19. 高木遺跡 | 20. 坂戸遺跡  |
| 21. 岡島遺跡    | 22. 郷中遺跡   | 23. 高井遺跡    | 24. 伊場遺跡 | 25. 梶子遺跡  |
| 26. 椿野遺跡    | A. 瑞龍寺山山頂墳 |             |          |           |

増加することから、質的な変化を遂げるとともに、広範な展開を見せたものと考えられる。まさにこれと軌を一にして、この有段タイプの高坏Ⅰ類は、弥生時代後期になると、西は瀬戸内地方から東は東海地方にまで及ぶ広範な分布状況を示し、さらには、この広範な土器の展開は「地域的様式圏」をはるかに凌駕しており、これが、甕などの日常生活用器種



第2図 基本器種構成表

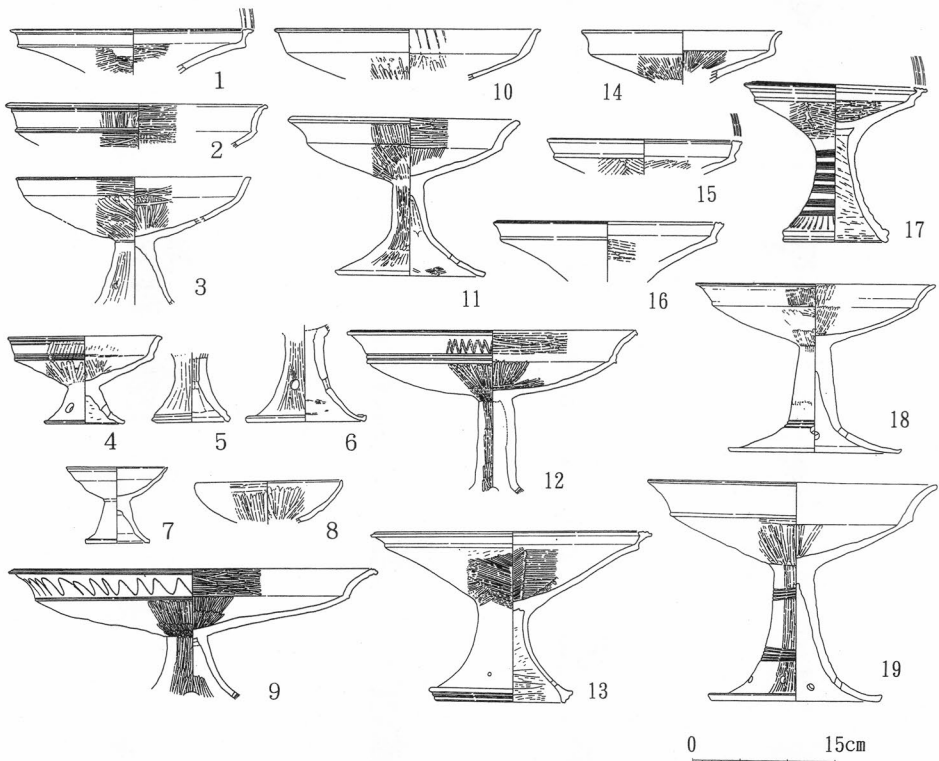
ではなく祭祀用器種としての色彩の濃い高坏の移動であることから、生活レベルとは明らかに異なったレベルでの移動に対して何らかの力が作用したものと考えられる。

それ故、時期を同じくして同形態の器種(高坏)が広範な地域において確認されることを重要視したい。

それでは、この高坏Ⅰ類が実際にどの地域の影響を受けて成立したのか具体的な事例を挙げながら検討してみたい。

まず、「山中式」と類似する資料として注目されるのは、大阪府東大阪市に所在する巨摩・瓜生堂遺跡<sup>(注5)</sup>の出土資料である。

これらは沼状遺構上層から出土したものであり、河内地方では第五様式初頭に比定されている。特に9の高坏は、器面調整も縦方向のミガキを基調としており、坏部外面上半には横方向にナデ調整を施した後、ヘラにより暗文状にはあるが波状文を施し、その下部には一条の凹線を施している。さらには口縁端部にも二条の凹線が施されている。こうした一連の特徴は、まさに「山中式」前期の高坏Ⅰ類とも合致するものであり、両者の関係



第3図 河内及び吉備の土器(注5・8・10・11文献から引用)

1~9. 巨摩・瓜生堂遺跡出土 10~14. 亀井遺跡出土 15~17. 上東遺跡出土  
18・19. 百間川原尾島遺跡出土

は疑いないものと考えられる。しかし、一方ではこの遺跡に対しては「吉備系土器を継続的に使用、製作する吉備系のコロニーが形成されていた<sup>(注6)</sup>」とする認識もあり、また、実際に1や5の高坏は吉備地方において特徴的な形態(15～17がその典型例)であり、1～9に関しては吉備地方からの搬入品であるとする指摘もある<sup>(注7)</sup>。また、八尾市に所在する亀井遺跡<sup>(注8)</sup>においても吉備地方からの搬入品と考えられる土器(13)が出土している。このことより、「山中式」の成立に影響を与えたのは、河内地方ではなく吉備地方であるとする説も提示されている<sup>(注9)</sup>。しかし、2～4、6～12の土器に関しては吉備地方において類似する資料を見いだすことができず、これらは吉備地方からの搬入品とするよりも、むしろ河内地方において創出されものとするほうがより妥当性が高いものと思われる。その例証として百間川原尾島出土資料<sup>(注10)</sup>について考えたい。図示した18、19の高坏は形態、及びその調整において巨摩・瓜生堂例9の高坏と系譜を同じくするものと考えられる。また、今回は図化し得なかったが吉備地方において、外反する坏部を有し、その外面にヘラ描きによる暗文状の波状文を施す例が、少なからず認められ、こうした点においても両者の関連性は高いものと考えられるが、吉備地方においてはこのタイプの高坏は上東鬼川市Ⅱ式以降にならなければ出現しない<sup>(注11)</sup>。このことから河内地方例が時間的に先行することが窺える。また、この直前の上東鬼川市Ⅰ式新相において、脚部は前型式の特徴を残しつつも、坏部の形態は外反度の強いタイプへ変化している、いわば過渡的形態と考えられるものが散見される。こうしたことから、成立のインパクトを与えたのは直接的には吉備地方ではなく、あくまでも河内地方であると考えたい。

次に伝播経路についてであるが、まずイメージとして最初に頭に浮かんでくるのは、近江から濃尾平野を経由して上野・下野へと至る東山道である。このほかに可能性の高いルートとしては、畿内との繋がりが強く大和から伊賀、そしてそこから青山峠を越えて中勢地方に達し、さらに北上して濃尾平野に至るというものであろう。しかし、ここでは前者をその候補として考えたい。これは、伊勢湾沿岸地域における近江系土器の存在から類推されることであり、この地域への近江系土器の流入は、各地方によってそれぞれ受け入れに対する温度差が存在するようではあるが、既に中期段階から確認されており<sup>(注12)</sup>、後期段階におけるそのルートとしての基盤整備はなされていたものと考えられ、また、河内地方を震源とする伝播である以上、近江を経由することもごく自然に受け取られることである。さらにこの説を補強する材料として、「山中式」の基本的な器種として成立の当初から存在している有段口縁を呈する鉢Ⅱ類を取り上げたい。これは、近江において創出された器種であり、その成立時期は近江Ⅴ-1様式とされている<sup>(注13)</sup>。これは河内Ⅴ-2様式併行期にあたり、「山中式」成立の直前期に当たり、河内から濃尾平野に波及する過程において、

近江から同時にもたらされたものと考えたい。

以上のことより、第五様式初頭(河内V-0様式併行期)<sup>(注14)</sup>に河内において坏部に段を有し上段が外反する高坏が新たに創出される。そして、このタイプの高坏がその後、周辺地域へと影響を与え始めるが、吉備地方へは、上述のとおり上東鬼川市I式新相~II式古相(河内V-2~3様式併行期)の時期に、また、東海地方へは、中期後半の「高蔵式」と「山中式」との間に若干のヒアタスが指摘されている<sup>(注15)</sup>ことから、後期初頭段階(河内V-0~1様式併行期)において即座に伝播したとは考えられず、やや、遅れて影響が及んだものと考えられる。

今回の様式の拡散は、同一の論理にもとずいた同時多発的な現象と考えておきたい。そうしたことから、尾張地方においては河内V-2~3様式併行期に及んだものと思われる。よって、山中式の成立も、後期前葉(河内V-2~3様式併行期)の段階に求め得るものと考えられる。

また、「山中式」において特筆すべきことは、成立に際して多大な影響を及ぼした河内地方の土器が、濃尾平野低位部に招聘された外来系土器であるということであり、しかも、後期における山中様式の確立が、現時点ではインパクトを受けた直後、急速になされたように見かけ上は見えることであり、在地系優位から外来系優位へと様々な様相を呈しながらの交替現象と言うものが見て取ることができない。つまり、河内系土器の属性は移入と同時に受容土器の成立に寄与し、そしてそれがストレートに在地系土器への道を歩ませている。後期段階での土器移動がそれ程までに強烈なものであったのか、あるいは、「高蔵式」との断層を埋める様な折衷土器等を含む過渡的な段階を示す古い様相の土器群が存在しているのかは今後の調査を待たねばならない状況である。

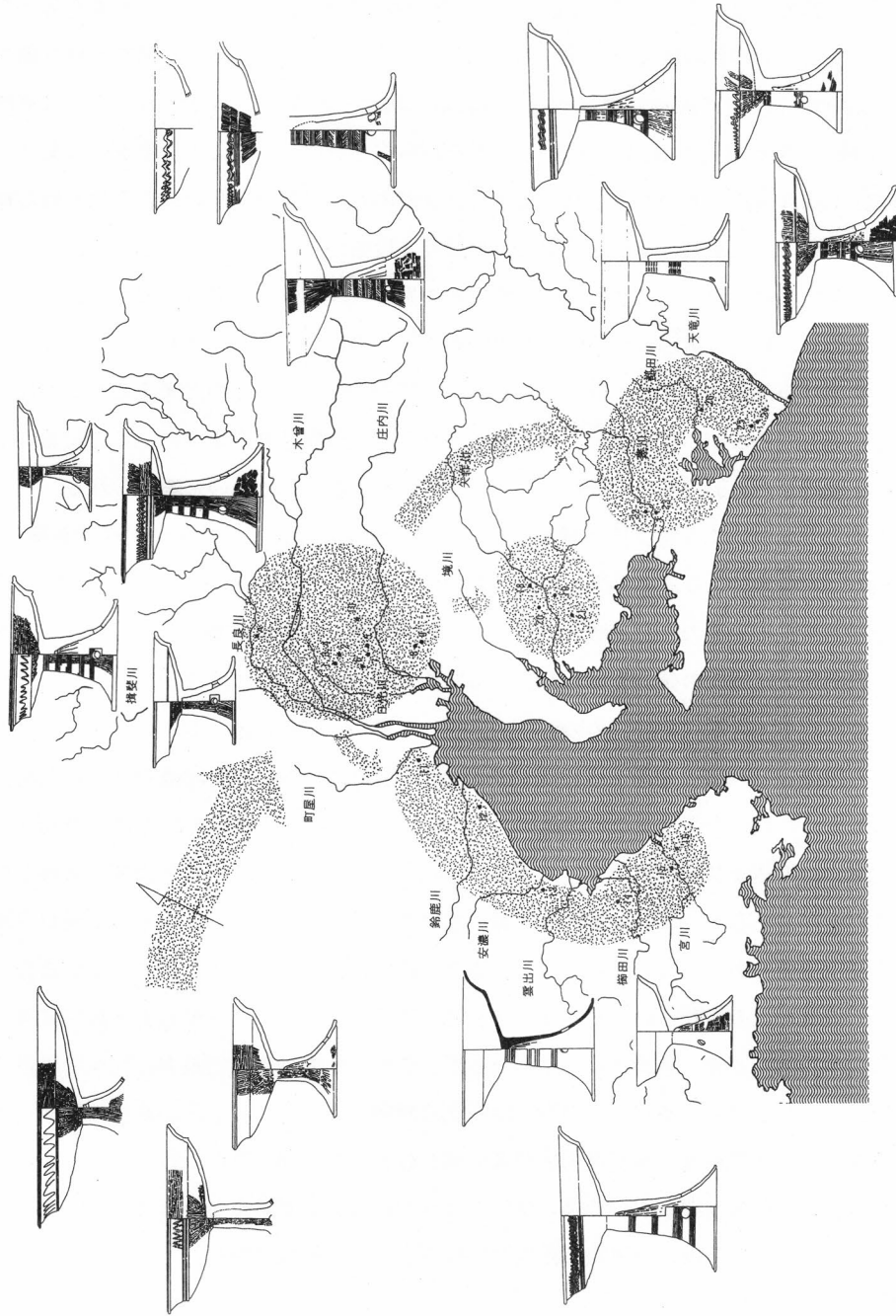
## 2. 様式圏構築の道程

山中式併行期における周辺地域の様相を概観したい。

まず、様式圏の空間的広がりについて考えてみることにしたいが、その際には、共有型存在をもとに地域的大様式圏を、専有型存在をもとに地域的小様式圏を捉えること<sup>(注16)</sup>としたい。

山中様式の影響を強く受けたと考えられる地域は伊勢湾沿岸を中心として、ほぼ東海地方に限定することが可能である。南は伊勢地方南部の宮川流域を限りとし、それ以南においては現在の所は確認されていない。西は自然の要害でもある鈴鹿山脈、及び布引山地とによって区分され、それ以西の伊賀、そしてさらに西の畿内地方とは異なる様式圏を形成している。北に関しては、岐阜県内の様相が不明瞭であり明確にはし得ないが、濃尾平野

を眼下に見下ろす立地にある瑞龍寺山山頂墳<sup>(注17)</sup>(A)より、山中式前期段階の土器が検出されている。このことから、濃尾平野低位部全域がその範囲に含まれると考えて差し支えないであろう。さらに東であるが、静岡県内においては天竜川を挟んで全く異なる土器様式圏を形成していることは早くから指摘されてきたことであり、天竜川を境として、それ以东



第4図 様式圏構築モデル

に限られるようである。

これが「山中式」における地域的大様式圏である。

次に、時間的側面に着目し、各地方がどの段階において山中様式圏への編入が行われたのかを考えてみたい<sup>(注18)</sup>。

まず、伊勢地方であるが、草山遺跡<sup>(注19)</sup>や中楽山遺跡<sup>(注20)</sup>において、3段階からの影響が考えられる。しかし、その他の多くは4段階以降からであり、このことから本格的な様式圏への組み込みは4段階に入ってからと考えられる。次に三河地方であるが、ここでは東部(豊川流域)と西部(矢作川流域)において若干ながら様相を異にしており、西部では矢作川河床遺跡<sup>(注21)</sup>や岡島遺跡<sup>(注22)</sup>においてみられるように、3段階から影響を受け始めたと思われる様相を示している。しかし、本格的な編入はやはり4段階からと考えたい。これに対して東部では、郷中遺跡<sup>(注23)</sup>においては2段階から既にその影響は現れ始めており、また、最近の調査によっても、東光寺遺跡<sup>(注24)</sup>から確実に2段階までさかのぼる例が報告されている。このように、東部は西部よりも早く、既に2段階から影響を受け始めたものと考えられる。最後に西遠江地方であるが、伊場遺跡<sup>(注25)</sup>、梶子遺跡<sup>(注26)</sup>の例からも理解されるように、ここにおいても既に2段階からの影響が見て取れ、編入もこの段階になされたものと考えられる。

以上のことより、山中様式圏の構築過程をモデル化すると、まず弥生時代後期前葉に、河内地方との接触により濃尾平野低位部において「山中式」が成立する。そして新たに成立した様式を自らのものとし咀嚼・吸収している期間が、山中式前期にあたる1段階である。この期間は新様式の確立を試行している期間でもあり、そのような状況からも、濃尾平野低位部からの拡散現象は認められない。次に、濃尾平野低位部において「山中式」が確立した段階、これは2段階～3段階にあたり、「山中式」の大きな特徴でもある加飾性を強めて行く時期でもある。この段階からその影響力は外部へと指向しはじめ、最初にその様式圏に組み込まれるのが、東三河地方と西遠江地方である。このことは先の考察から導かれたものであるが、この二地方は、甕における共通性に象徴されるように生活レベルでの交流は活発であったものと考えられ、また、同時期に様式圏に組み込まれていることから、一地域として括れるのであろう。そして、4段階になって、伊勢地方と西三河地方が新たに様式圏へと組み込まれることとなるが、この二地方は先の二地方に比べて尾張地方に近接していながら、様式圏への同化は遅れる傾向にあり、このことから、この様式圏の拡散現象は、淵源地域である濃尾平野低位部を核として時間、及び距離とが比例して同心円を描くような在り方を示してはいない。言うなれば、まず拠点となる地域へと先行して影響をあたえ、その後、一次的に様式圏に組み込まれた地域が周辺へと影響を与えて行くようである。



こうした地域的大様式圏への組み込みに時間差が生じるのは、濃尾平野低位部勢力が抱えている相手側勢力に対する価値観の反映と捉えることが可能であろう。これは換言すれば、土器様式を共有することによって形成される同盟関係の中における地位の反映であり、編入の遅速により、その地域が尾張地方において重視されていたか否かが諮れるのではなからうか。

以上のように、伊勢湾沿岸地域における山中様式の拡散状況を、濃尾平野低位部をその震源とし、また、各地に普遍的にみられる高坏Ⅰ類という共有器種に着目して考察してきたが、この様式圏の構築は、優位なものから劣位のものへの一方通行的なものではなく、あくまでも濃尾平野勢力が主導的な立場として若干は優位にあったかもしれないが、ほぼ等質的な関係のもとに行われたものと理解したい。このことは、共有器種の存在と共に、専有器種の存在によって地域的小様式圏が保たれていることから窺うことができるであろう。

### 3. 弥生時代後期の伊勢湾沿岸地域

「山中式」は一部の器種を除いて弥生時代中期の型式との間に断裂が認められ、その成立には、畿内地域(特に河内地方)の土器が深く関わっていると考えられる。そしてこの成立の契機となった外部からの影響は、後期前葉に及ぼされており、この時期は、畿内・瀬戸内連合と北部九州による鉄資源確保を目的とした争乱が、畿内・瀬戸内連合の優位のうちに終結したものと考えられる直後に当たり、畿内地方においては一時的に緊張関係が緩和している時期にあたる。こうした状況の中でなされたこの接触現象は、非常に短い時間に限定されたものと考えることができ、それは、山中式の典型的な器種の成立が外部の影響に依存しているながら、在地系要素と外来系要素の経年的な転換がみられず、受容後、即座に外来系の在地化がなされていること、また、相手方の要因として畿内地域ではこの後、再び緊張関係の高まりが看取されることから推測することができる。つまり、こうした短期間でありながら強烈に作用する土器の移動を伴った現象であることが、その背後事情として地域間の再編成をにらんだ政治的行為であったと考える所以である。

しかし、そうした思惑に反して、その後、まもなく畿内地域では緊張関係の高まりによる地域の閉鎖性が顕著になり、また、そうした情報が伊勢湾沿岸地域に新たな影響を与えることとなる。それが環濠集落、及び高地性集落の出現である。環濠集落は弥生時代の開始期より存在するものであり、その性格に関しては防禦的なものみに限定できるものではないが、ここでは時代的背景からも後期に出現したものに関しては、防禦的性格の強いものとして考えを進めることとする。

濃尾平野低位部では、阿弥陀寺遺跡<sup>(注27)</sup>や朝日遺跡<sup>(注28)</sup>において、また、名古屋台地においては瑞穂遺跡<sup>(注29)</sup>、見晴台遺跡<sup>(注30)</sup>で新たに山中式期に環濠の掘削が認められる。また、三河地方においても、岡島遺跡<sup>(注31)</sup>、東光寺遺跡<sup>(注32)</sup>、欠山遺跡<sup>(注33)</sup>、大廻間遺跡<sup>(注34)</sup>などで濃尾平野と同様に、山中式期に環濠の新たな掘削がなされている。西遠江地方でも、伊場遺跡<sup>(注35)</sup>、梶子遺跡<sup>(注36)</sup>において、上記の二地域と同様の動向を示している。伊勢地方においては、環濠の開溝時期を確定できてはいないが、先に取り上げた二遺跡において、後期段階の環濠が確認されている。これらの環濠は、若干の前後が認められるものの開溝の時期はほぼ山中式期に限られており、これは、山中様式圏の拡がりとともに、畿内の緊張状態が情報として各地域に伝えられたことによると考えられる。そして、これらの環濠はほぼ同じ時期(廻間Ⅰ式前半期)に一斉に埋没しており、この時期はまさに畿内地域における庄内式併行期にあたり、前方後円墳成立の直前期でもある。このような環濠の急速な埋没と、その直前段階からの小規模単発的な集落の顕在化という動向は、古墳時代へ向けて地域内の構造を変革し始めたことの現れであろう。

#### おわりに

弥生時代後期は激動の時代である。

弥生時代後期は、古墳時代への変革を控えた段階であり、古墳を成立させた政治的連合体の形成が、古墳創出の段階においてはほぼ完成をみていることから、その萌芽は、弥生時代後期のある段階から既に芽吹いていることは疑いようのないことであり、まさに、前方後円墳を成立させうる準備段階とも言うべき、それまでとはレベルを大きく違えた地域連合形成の胎動期にあたり、各々の地域において、再編成の流れが加速度的に早まる時期である。

今回は後にその連合体を構成する一員となる伊勢湾沿岸地域が、一つの大様式圏へと統合して行く過程を、土器の移動という一側面に着目して考察を行い、その一端を解明することができたものと思う。

(なら・やすまさ＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

付記：本稿は、1995年1月に専修大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正を加えたものである。

在学中にご指導を賜った亀井明德先生、土生田純之先生、白石太一郎先生ならびに、資料の実見に際してご配慮をいただいた土本典生氏、赤塚次郎氏、宮腰健司氏、野口哲也氏、鈴木敏則氏、柳瀬昭彦氏、石神幸子氏に記して感謝の意を表します。

- 注1 紅村 弘「二、『研究の進行』』『東海の先史時代 綜括編・復刻版』 (1984)
- 注2 大参義一「弥生式土器から土師器へー東海地方西部の場合ー」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』XLVII (1968)
- 注3 注2文献に同じ
- 注4 これには、中期から継起的に発展してきた器種と、この段階に新たに参入してきた器種との二者が存在する
- 注5 玉井 功・井藤暁子編『巨摩・瓜生堂』 (財)大阪文化財センター (1983)
- 注6 高橋 護「第3章第3節3」『岡山県史 原始・古代1』 岡山県史編纂委員会 (1991)
- 注7 寺澤 薫・森井貞雄「1 河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編I』 (1989)
- 注8 宮崎泰史編『亀井遺跡II』 (財)大阪文化財センター (1984)  
 広瀬和雄・石神幸子編『亀井(その2)』 (財)大阪文化財センター (1986)
- 注9 赤塚次郎「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム 3』 (1993)
- 注10 正岡睦夫編『百間川原尾島遺跡2』 岡山県文化財保護協会 (1984)
- 注11 柳瀬昭彦編『川入・上東』 岡山県教育委員会 (1977)
- 注12 石黒立人「伊勢湾地方から見た近江系土器」『愛知県埋蔵文化財センター 年報 昭和62年度』 (1988)
- 注13 兼康保明「9 近江地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編II』 (1990)
- 注14 注7文献に同じ
- 注15 石黒立人「高蔵式から山中式へ(予察)」『欠山式土器とその前後 研究・報告編』 (1987)
- 注16 鈴木敏則「山中様式三河型(寄道様式)」『三河考古 創刊号』 (1989)
- 注17 大参義一「弥生時代」『岐阜市史』 (1980)  
 赤塚次郎「瑞龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告 第1集』 (1992)
- 注18 ここでは、山中式を5期に区分し、1期を前、2、3期を中、4、5期を後期とする
- 注19 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報 NO.1~10』 (1982~)
- 注20 下村登良男「伊勢市上地町・中楽山遺跡」『昭和47年度県営團場整備事業地域埋蔵文化財報告 8』 三重県教育委員会 (1973)
- 注21 岡崎市史編纂委員会「矢作川河床遺跡」『新編 岡崎市史16』 (1989)
- 注22 池本正明編『岡島遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター (1990)  
 〃 『岡島遺跡II・不馬入遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター (1993)
- 注23 豊川市教育委員会『郷中・雨谷』 (1989)
- 注24 加藤安信編『東光寺遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター (1993)
- 注25 向坂鋼二編『伊場遺跡遺物編3』 浜松市教育委員会 (1982)
- 注26 辰巳 均・鈴木敏則『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書V』 浜松市遺跡調査会 (1980)  
 太田好治・漆畑 敏『国鉄浜松工場内(梶子)遺跡第VI次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会 (1983)  
 鈴木敏則『梶子遺跡VIII』 浜松市文化協会 (1991)

- 注27 石黒立人『阿弥陀寺遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター (1990)
- 注28 加藤安信編『朝日遺跡』 愛知県教育委員会 (1982)
- 注29 服部哲也編『瑞穂遺跡第4次調査の概要』 名古屋市教育委員会 (1987)
- 注30 名古屋市教育委員会『見晴台遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次調査発掘調査概報』(1966)
- 注31 注22文献に同じ
- 注32 加藤安信編『東光寺遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター (1993)
- 注33 久永春男・芳賀 陽「附載第二 欠山遺跡」『瓜郷』 豊橋市教育委員会 (1963)
- 注34 知多市教育委員会『大廻間遺跡』 (1972)
- 注35 注25文献に同じ
- 注36 注26文献に同じ